〔美術の窓(64)

古代古典美術の成立—飛鳥・白鳳・天平〔2〕
飛 鳥 美 術 (2)

大和文華館館長 吉 川 逸 治

飛鳥美術の曲線文様 この種の抽象系文様は、幾何学系文様とは違って、呪術的な起源をもち、一種の神秘性を含んだ文様であって、この場合は、縄文文様と同一ではないが、やはりC字形を基礎単位とする曲線文様で、それが展開して連続波形文にもなり、パルメット形にもx字形にもなるが、さらに文様展開の振幅が大きく複雑であり、豊富である。だから網状にC字形が編成され、また大きいCから中小のCが蔓のように派生し、連続して、竜頭や蹴爪をつければ蟠螭文になり、葉形をつければ忍冬文にもなり、ハート形にかたまればパルメットになるが、このパルメットはまた内部に小パルメットを生もうと細胞分裂する。解体すると火炎文・雲気文になる。まことに、動物文・植物文すべてを自分の曲線文様の網のなかに編成し、離散すれば一種の宇宙的な生命流動の大図様まで作りあげるので、いかにも気韻生動の名にふさわしい文様体系である。

これは文様系統としては、雷文系統とは違って、東北アジア系統の起源であろうが、先秦銅器や漢代工芸から、降ってこれが最も大きな展開を見せるのは北魏の仏洞装飾であって、装飾彫刻もさることながら、敦煌の仏洞壁画に旋風的構図を描かせる源流を作っている。

紀元前三世紀から六世紀まで東アジアを旋風のごとくに吹き荒らしていたこの曲線文様構想の影響を、止利の金堂釈迦三尊の構成に認められないだろうか。止利はここで、人間像とこの抽象的曲線文様体系と幾何学主義の三者を結合しているが、ただ、厳しい幾何学主義が強烈で、曲線文様体系が制圧されて看過されがちである。

救世観音 しかし、飛鳥仏のもうひとつの傑作、夢殿の観音木像(図)では、その大宝冠に、光背に、全身をつつむ衣装・天衣の曲線、垂髪の曲線に、かの曲線文様体系の反映が感じられ、尊像の霊魂は宇宙に瀰漫している霊気と共感しているのかと覚える。これほど霊魂がなまなましく刻みだされている神秘的な彫像は他にあるまい。古代ギリシア人が神殿の秘像として崇敬した古い木像とは、このような感銘を与える本尊像だったろう。

救世観音像 法隆寺

百済観音 百済観音(図)は、金堂の四天王像のように、すでに透し彫り金具の装飾がなんら神秘的な表現を付加していない、単なる無償な飾りものになっている、新しい時期を代表する傑作である。すべての意味が、人体像の丈高い、すんなりした胴体で十分に表現されている。穏やかな顔は、拝む者の心を暖かく迎え、しかもなみはずれた背丈に頼もしい無限の慈愛を感じさせる。

中宮寺弥勒 中宮寺の弥勒(図)は、もう一歩人間の世界に近づいている。これほど日本人の仏菩薩観というものを素直に、平明に表わしている像はあるまい。七世紀後半の日本人が、おそらく当時の女性たちが心に思慕した、最も親しい御仏の姿を刻みだしたものであろう。聖徳太子が仏法をいれられてから大和の地にはなんという激しい事件が相ついだか。おかげで人の心は成長した。この弥勒像の魅力は、人間を慈しみ深く考えているからである。拝む人びとも、この弥勒の思考のなかに誘いこまれる。そして、人びとを御心に誘いこむために、この像は顔から右手・右膝・左手と、また台座から御顔へと、見る者の視線を誘うために、姿勢が幾何学的な秩序をもち、リズムをもって整えられているのに気づくだろう。頭部から胴体・衣襞まで、まとまりのよい平らな面で作られ、細々した偶然性や現実性は除き、思考のリズムを乱さない。彫像の運動表現とか、動勢、リズムというものは彫像自体に備わったものだから、このような静止像も動勢をもち、われわれの心を導いてゆく。(つづく)

百済観音像 法隆寺

弥勒菩薩半跏思惟像 中宮寺

(筆者著書「日本の美術1 日本美術入門」監修／亀井勝一郎・高橋誠一郎・田中一松、1966、再版1980年、平凡社、より

本書の英訳本〝Major Themes in Japanese Art〟translated by Armins Nikovskis, 1976, Weatherhill, New York)

季刊 美のたより No.120
平成9年8月21日
発行 大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.